オーストリア・ドイツのエコロジー建築動向

第8回

自然と住まい・人との関係再構築と日本のつくり手が学ぶべきヒント

第12回エコバウ建築ツアー（実行委員会事務局：イケダコーポレーション）の視察記としてオーストリア・ドイツの超省エネ建築を紹介してきたシリーズの8回目。今号はツアーの通訳・解説を務めた前橋工科大学大学院准教授・石川恒夫さんへの取材をもとに、技術開発の背景にある建築の考え方の変化と、日本のつくり手が参考にすべきヒントをまとめた。

「そして建築が人間になる」

世界中が新たな価値観を模索

生活時に発生するCO2を抑制し、使用するエネルギー・資源の量を減らす。これまで見てきた「パッシブハウス」―超省エネ建築の主眼はそこにある。

地球（自然）の資源には限りがある。このことをどうとらえ、どう行動すべきか。それはある意味、人の生き方に関わる根源的な問いだ。このシリーズでは技術革新の手法を中心に紹介してきたが、同時に求められているのは価値観の変革。すべての先進国が模索のなかと言って過言ではない。

前号で紹介したアルケミア・ノーヴァ（革新的植物性化学物質研究所）のハンスヴェルナー・マクヴィッツさんは「現代は自然と人間の生き生きした関係性が断ち切られている」と指摘。これからは「自然に祈りを捧げる思想が求められる」と説いた。

前橋工科大学大学院准教授の石川恒夫さんはこれを「覚醒」という言葉に置き換える。

「祈りを捧げるとは、目を瞑り眠り込むことではない。むしろ逆で、はっきりとした意識のなかで物事を考える。無限の成長はない（＝自然は有限）というのは、生とともに死があるということ。このことを我々はもっと意識する必要がある」

自然のなかの巣としての家

石川さんが範としてあげるのは、ルドルフ・シュタイナーの思想だ。

第一次世界大戦後のドイツで「精神生活における自由」の実現に向け、国家から独立した私立学校（ヴァルドルフ学校）を創設した教育者であり建築家。その思想は、有機的な生命の循環の原理にもとづいているという。『そして建築が人間になる』という言葉は象徴的だ。

「この言葉は、シュタイナーが初めて建築について講演した際のタイトル。今日においてなお、エコロジーとバウビオロギーを結ぶキーワードでもある」と石川さんは言う。

建築は有機体であり、人を包む第三の皮膜であり、生涯を寄り添うパートナーである―自然とともに人が生きる（死ぬ）ための、巣としての住まい―。

そのあり方には、いまだ明快な答えがあるわけではない。「さまざまな解釈が成り立ち、奥が深い。その意味で、我々はまだまどろみのなかにある」

欧州と日本の精神文化の違い

対象を数値化してとらえる

有機的な建築とは、たとえば人間や動植物に見られるようなプロポーションの美を指しているとも言える。建築の総体と部分との関係に、有機的なつながりを見出すことも可能。建築を成り立たせるシステム―水や熱、空気の有機的なデザインのことだととらえることもできる。

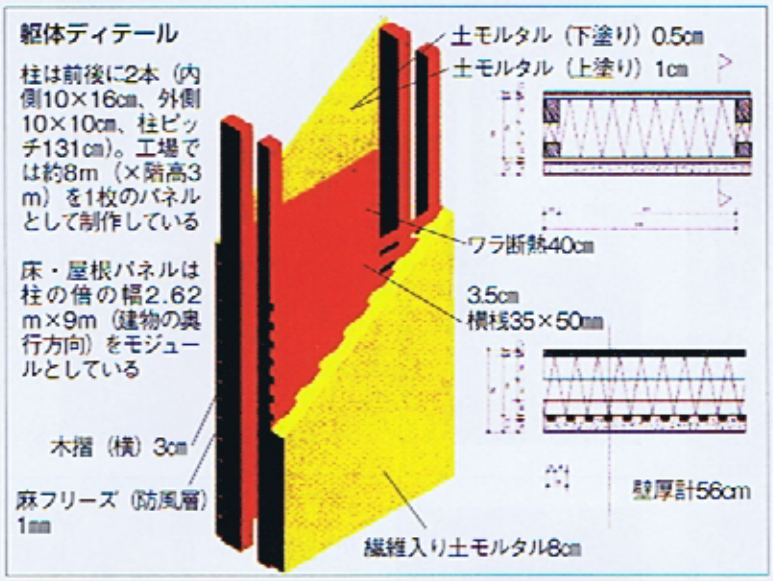
オーストリア・ドイツの建築は、そこを合理的に追求する。黄金分割のような法則性を用い、さまざまな芸術的造形を創り出してきた歴史から来るアプローチ。小さな部品の組

み立てを繰り返して大きく分厚い木造をつくる発想も、石や土を積み上げてきた文化の産物だ。

そこでは木材や自然素材も、建物を構成する一要素に過ぎない。抵抗感なくプレファブリケート（＝工場生産）とシステム設計のなかへ組み込み、工期短縮とコストダウンを目指していく。

反面、日本は、匠の技に畏敬の念がある。天然木に対する思い入れも強く、木材や自然素材を単なる部品として見られない。それは自然に祈りを捧げる思想のあらわれとも言えるが、石川さんの言葉を借りれば、祈りは「盲目的になって、眠り込む」状態に陥りがちだ。

「我々は職人に畏敬の念を持ち、それゆえ精度を求めすぎてもいる。それ自体は尊いことではあるが、木の狂いや割れが、即クレームという短絡的な方向にいくのは考えもの。住まいをパートナーととらえるなかで、寛容性がもう少しあっていい」



工場生産の木質パネルや土ブロックを組み立ててボリュームのある建物をつくる例。性能はパッシブハウス基準を満たす

自然をドライに突き放す

自然は本来あいまいで、ほどほどの存在でもある。太陽や風を正確に読み、予測することは誰にもできない。そうしたことを謙虚に受け止めながらも、建築をできる限り総体（＝耐久性、機能性、経済性、快適性、省エネ性など）でとらえ、最適なバランスを考える。シュタイナーの言葉の意味はそこで、多様性を認めることとともイコールだ。

欧州的なアプローチは、自然を突き放してとらえ、一定のところでドライに線を引く。つまりは数値化。効率はいいが、均質で血の通わない建築になるおそれもある。

逆に日本的なアプローチは、自然を身近に引き寄せ一体化しようとする。多様性を許容できる手法だが、生産性が低い。コストダウンを図ったり、一定の量をつくっていったりするのは不得手だ。

「どちらも良し悪しがあるが、重要なのは自然と調和するバランスをどこで保つか。ただし、対象を客観的に見ないと距離感は測れない。そこに、オーストリア・ドイツの建築から学べるヒントがある」

何もかも定量化できるわけではないことを念頭に置きつつ、建築の物性をある程度まで数値（＝コスト、性能、CO2排出量など）で把握する。その上に立ち、木材をはじめとする自然素材のプレファブ化・システム化を進め、コストダウンを図りながら建築に、外部環境の激しい変化を穏やかに受け止める一定の厚さとボリュームを与える。つまり、壁の蓄熱性やサッシの性能、開口部の日射遮へい機能などを高めていく。

今後は、そうした方向が考えられるだろう。

自分の手で空間を染め上げる

「色の言葉」が空間の魂になる

一方、数値化のものさしにのらない要素で言えば、一つに「色彩」がある。石川さんによると、色は単なる情報でも記号でもなく「空間の魂」とも呼ぶべきもの。オーストリア・ドイツの建築は、色の動きは心の動きのあらわれであるという前提に立って空間をつくる。

今回のツアーでは、ドイツとの国境に位置するオーストリア・ザルツブルクで、1994年竣工のシュタイナー学校および5月に竣工したばかりの祝祭ホール棟（増築）を見学した。その祝祭ホールの壁・床・天

石川さんが設計したY邸リビング。色彩を住まい手に寄り添う存在としてとらえている

井は、自然塗料（アグライア）で染め上げられていた。

「動物は環境の影響を直接的に受け、純粋に色彩を体験する。だが、感情や本能の海から抜き出た自己意識を持った人間は、純粋な色彩体験を持つことができない。そのため学習が必要になる」

色彩体験の学習は、マニュアルにのるものではない。ただし、色には倫理的な作用がある。たとえば青は内に輝き、黄は外に輝き、緑は流れていく動きとして、赤は迫る動きとして。そうした「色の言葉」を読み取りながら、空間を染め上げていくわけだ。

第12回エコバウ建築ツアーで通訳・解説を務めた前橋工科大学准教授の石川恒夫さん

日本の建築をもっと自由に

同じ色でも、感じ方は気持ちの状態によって違う。自分の手を動かすことで、色の言葉を積み重ねていくのがオーストリア・ドイツにおける塗装の意味の一つ。「住まいをパートナーととらえるなら、色はまさに自分に付き添う存在。日本の建築も、もっと色を持っていいのでは」

日本には、白太の生地や漆の光沢を美しいと思う繊細な感性が息づく。だが、匠の技にほれぼれするあまり、一般の人が気軽に手を出してはいけないような雰囲気をつくってもきた。このことは、大手ハウスメーカーに代表される商品化住宅の急速な普及と無関係とは言えない。

「ドイツ・オーストリアは、自然素材もモノとしてしか見ないような鈍感さがある。いい加減とも言えるが、しかし、施主にとっての家は自由でおおらか」と石川さんは話す。

DIYの文化も、そうした精神風土の上に立つ。オーストリア・ドイツでは、引っ越す前に住まい手が壁に壁紙を貼って白い状態に戻すのが通常。そこに次の住まい手がまた色を塗り、新たなしつらいを施していく。自分の場所は自分でつくるという考え方だ。

「デザインや材料といった表面的なことではなく、こうした考え方を応用したい。自然素材をプレファブ化するなかで職人の技を生かし、かつ、住まい手自身が手を入れられるような余地を持つことで家を身近に感じてもらう。省エネの技術や手法もポイントだが、その先に、自然と人が調和する住まいを見すえたい」

（つづく）

ザルツブルクのシュタイナー学校。「色彩」が空間の魂をつくるという考え方に立つ

同祝祭ホールの色彩。塗るのではなく、空間を染め上げる